

24 言語聴覚士国家試験対策の試み

学院 言語聴覚学科 下嶋哲也 阿部晶子 北義子 山下真司

<目的>

当学科では、国家試験開始以来はじめて複数名不合格者を出した3年前から、言語聴覚士国家試験に対する受験対策を開始した。国家試験対策の学習については、厚生労働省が定めた国家試験受験資格授与のための規定取得単位には含まれないが、当学科として独自に時間割に組み込み取りこんでいる。今回は、その経緯および成果について報告する。

<方法>

国家試験対策は毎年8月末から開始し、12月初旬まで継続した。学習の総回数は21回、総時間数は46時間であり、その内訳は1) 過去問による模擬国家試験(6時間)、2) 問題演習(2時間×20回)となっている。1)の模擬国家試験の問題選定は、教官により任意に行った。2)の問題演習に先立ち、教官が出題基準を基に試験範囲全体を網羅できるよう項目を決め、学生に記述式の問題を作成させた。問題の作成にあたり、知識の有無を確かめるためだけでなく、その後の学習にも役立つ資料とするため、詳細な解答・解説を添付するよう指導した。問題演習では毎時間学生の数分(30枚程度)のプリント学習を行い、個々の学生の試験範囲内における各分野(全49分野)の成績をすべて調査した上で一覧を作成し、演習を4期に区切って、期ごとに学生各自に対し個々の成績一覧を配布した。配布の際には、今後の学習プラン検討や学習方法指導、心理的状态の把握を目的としてフィードバックを行った。必要に応じて、個別面談を別途に行った。本年2月の国家試験終了後には、国家試験対策について学生アンケートを一回行った。

<結果>

対策を開始してから現在まで2回の国家試験があり、当学科は2回とも100%の合格率を維持できた。学生アンケートのなかで、学生が「あったほうが良い」と回答したものは、模擬国家試験(89%)、記述式の問題演習(86%)、学生に対する教官の個別フィードバック(最低1回以上)(83%)であった。

<考察>

国家試験の合格率低下の後で再度高いレベルに維持できたこと、学生アンケートで国家試験対策としておこなった主なものが80%以上支持されたことは、言語聴覚士国家試験に向けて学科として行った対策の有用性を裏付けると考えられた。一方で、4年以上前はほとんど学生の自主的な努力によって国家試験にほぼ合格していたことと併せて考えると、学生自身の学習に対する自律性、自主性を尊重することの難しさも反映していると考えられた。

<今後の課題>

学生の学力低下や意欲維持の困難さなどに対応しつつ、教官と学生が協力しながら高いレベルの臨床家を育成し続けることが今後の課題である。